

三河アララギ

平成三十年 2018年

九月号

第六十五卷 第九号



ニューヨーク日記(143) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Blue Shoe Diaries



またまたMeguへ行ってきました！今回はお酒に合った料理の出てくるディナー。何時も沢山美味しいお酒に出会わせてくれる酒ソムリエのお友達達がホーストです。男山と西の関のおじさん達と色々お話も出来て楽しかったよ。見て見てこのかわいいシャトーブリアンスステーキ。あっと言う間にペロリ。

Dinner at Megu again! It's a sake pairing dinner hosted by our sake sommelier friends. Where we got merry and chatted with the sake dons from Otokoyama and Nishinoseki. Mmmm sake and food! Smile my little chateaubriand!

表紙・ジャックフルーツ ニューヨーク日記(143)	Blue Shoe (2)	今泉 由利 (1)	牧原 正枝 (24)	田中 清秀 (34)
黄素馨の門	御津 磯夫 (4)	大須賀寿恵 (5)	森 厚子 (25)	植村 公女 (35)
三河アララギ歌集VI 歌集「續草々」	今泉 米子 (6)	三田美奈子 (25)	山崎 俊子 (25)	今泉 如雲 (35)
三河アララギ歌集VI	河原 静誠 (7)	水野 絹子 (25)	牧原 規恵 (25)	杉浦 弘 (35)
月光	岡本八千代 (8)	水野 規恵 (25)	水野 規恵 (25)	田中 清秀 (36)
雲の上	弓谷 久子 (10)	現代学生百人一首	東洋大学	丸山酔宵子 (38)
証	内藤 志げ (12)	清水 理沙 (26)	萬葉秀歌の鑑賞	大橋 望彦 (40)
高温	阿部 淑子 (13)	長尾 愛衣 (26)	「江上浩二の独り言」	津之地直一 (41)
十二単衣	今泉 由利 (14)	ギラニサラ (26)	絹の話(94)	江上 浩二 (42)
ジャガ芋	清澤 範子 (15)	山岸 美祐 (26)	楽しい時間(70)	今泉 雅勝 (44)
あの日	安藤 和代 (16)	阿部紗也香 (27)	漢詩研修(二十三)	山本紀久雄 (46)
月明り	森岡 陽子 (17)	大竹 風音 (27)	『俳聖』松尾芭蕉	平井 茂行 (48)
花壇の野菜	白井 信昭 (18)	村上 雄梧 (27)	『歴代天皇御製歌』(九十二)	中屋 保之 (50)
災害	伊藤 忠男 (19)	森岡 陽子 (28)	貫名海屋資料館(52)	
不在	杉浦恵美子 (20)	高橋 育郎 (30)	本田カイロブラクティック先生の春夏秋冬	
南瓜	山口千恵子 (21)	『俳句』		本田 勇気 (54)
内藤志げさんに捧げる挽歌	夏目 勝弘 (22)	浜田 紀政 (32)	御津磯夫短歌鑑賞	鮫島 満 (56)
梅雨もまたよし	夏目 勝弘 (23)	重野 善恵 (32)	「水魚」のことから(212)	岡本八千代 (57)
『いとよせ』	いーはとぶ	今泉 由利 (33)	編集室だより(二〇一八年七月)	
	稲吉 友江 (24)	柳田 皓一 (33)	野菜・まんだら(7)	今泉 由利 (58)
	鈴木美耶子 (24)	山迫 京子 (33)	「三河アララギ」について	
	吉見 幸子 (24)	山元 正規 (34)		(59)
		森岡 陽子 (34)		(60)

黄素馨の門（昭和四十一年〜昭和四十四年） 御 津 磯 夫

たなごころほどの植田も植ゑふりてここひそけしたださす参り路

いつの時いづこかゆきてあひし記憶よみがへるごとし西の陵

うまごやし紅き花穂にたつ見つつ植田にそひてややくだりなり

陵をめぐりて植ゑし稲みじかし黄ばめるさまも古^{ふる}ごと申す

みささぎの松しなやかに幹赭しあえかなるみうたの皇子をさながら

天ごもる光こほしき田原の中かたまる松に鳴る風もなく

高圓を山こえゆきていにしへの春日ともいひひ陵こもる

すぎし代の歴史も知らずただひとつみ歌のゆゑに戀ひ來し田原

みささぎのめぐりの植田山水のおちゆく音を垂水とぞきく

しげりふかき御垣をめぐる夏草の蛙草ともに露をこぼせる

三河アララギ歌集VI

大須賀寿恵

手の震へ止まねばしばし熱き湯に耐へて両手を浸してをりぬ

飲み終へてぬくみ残れる萩焼茶碗両掌につつむこのしばらくを

名残とはかくの如きかいま飲みし抹茶茶碗のぬくみ冷えゆく

起き出でて歩きはじめのわが体右に左にけふもゆらゆら

はたはたと音してストーブの火のつきゆくを瞬きしつつ吾は見てをり

ただ前を見つめての如き七十四年思ひ出などは無きごとくして

浅蜷貝珍珠貝などの殻多し埋め立てられて死にし貝の殻かも

寺の庭の木立に囁き合ふ目白あり洗ひし白き下着干しつつ

今年はまだ鸛^{うそ}なく声をきかざれどリラの蕾のふくらみにけり

新しく分家して来てより十八年組板の減りにおもひだしぬ

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

くろがねもちの高きところに幼き聲鶉の雛の孵へりたるらし

萬緑の草の中よりクリナムの淡紅ふむ花の鉾立ち

いにしへの國分寺土壇残されて今年の細き竹の子のたつ

見たまひし引馬野の野に噴き出でし湧井の水のあとかたもなし

時雨する引馬野の野を歩みつついくたび佇ちてうなづきましき

海見えぬ高き護岸を言ひ譯わけしてとほきみちのくの人とのほりぬ

安禮乃埼引馬野すべて杳かにて冷凍海老の硬き二三尾

ためらひつつ來りし街より琥珀色の匂へる杏をさげて歸りぬ

瑠璃揚羽また來りつつまつはれりひとと立てる鬼百合の花

白珠をつづれる花の白き葎夏蔭あかるき薺茗荷の花

三河アララギ歌集VI

河原静誠

鉢を持つも経巻を持つも笑み給ふ十六羅漢の前に吾が立つ
ノビタキの二羽飛び交へる墓原に吾は独りにて花殻を燃す
わが庭にとび来る小鳥多くして凶鑑あそびに一日くれたり

窓に視る五色の雲に掌を合はす眼内レンズを入るる日の窓に
ことさらに太く鋭く感じたり麻醉の針は吾の瞳に

保護眼鏡はづして鏡に映る顔充血残りて赤き目の顔

竹林の傾き揺らぐ路の上に最上川のくるみが音たてて落つ

土色の最上川くるみはからからと音して鳴るよ吾が掌の内に

四十糶にきめたる歩幅にて歩みゆく行在宮跡の歌碑を目指して

玉袋と剣と御所と三つの橋通り過ぎつつ万歩あゆまむ

月光つきかげ

蒲郡 岡本八千代

冴さえ冴ざえと今夜の月光照らすなり空しき心のごときわれにも

夜の窓閉めむとすれば遠き空上弦白き半月の光

外に出でて今夜の月光仰ぎたりなどかお父さんと呼びたきところ

おのづから独り暮しに馴れつつもロマンチックよ月光の下

わがメダカツひに死にたりけさの朝水瓶の水の静かな深みどり

この家に三人ぼっちのはずなのにつひにわれのみの独りぼっちか

買ひて来し油あぶらげ寿司ふたの二にぎり今宵はこれにてわれの夕めし

明日^{あした}のむ麦茶を菓^や罐^{かん}いっぱいに沸かしてをりぬ湯気みつめつつ

ジャガタラの皮を剥^むきをり夕暮れの光忠寺の森の窓に見えつつ

夫に従きて初めて台湾へ行きし時着てゆきしスーツつひに捨てたり

土屋文明磯夫先生よりのダチュラの葉^{ふた}二ところ伸びて今は花なし

十三人の「いーはとぶ会」今月から土屋文明の歌の勉強

次々と読みて調ぶることばかり文明短歌のむづかし^{たの}愉し

われらまた「海浜独唱」の御津先生に教へ乞ひつつ勉強勉強

すぐ思ふ「明日^{あした}は明日の風が吹く」ならば今日には今日の風吹くと

雲の上

豊川 弓谷 久子

農休みと言ふ日のありき村中の田植えの済みし七月朔日

ささやかな料理も並びて親も子も一日くつろぐ農の休み日

手作りの厚きメモ帳貰ひたり浮かびし一首書き留めをかむ

散歩にもメモ帳持てと訓されし御津先生が心に浮かぶ

ひたすらにこもりてをらむ早ばやと梅雨明けとなり酷暑となりぬ

大雨のニュース一日流れをり渦巻く濁流流れ行く家

現実と思えぬ光景テレビに見つつ被災地思ひ被害者偲ぶ

常識の通じぬ世情そのままに台風十二号異例のコース

ごうごうと空うなりをり台風は大雨伴ない今このあたり

皆既月食は雲の上らし仰ぎたる未明の空は只雲ばかり

迷ひこみし馬追い庭に放しやる啼き続けをり暑き日中を

蟬時雨に包まれ今日が始まりぬ今日も酷暑のひと日となるか

我が目にもはつきり見える赤い星大接近のあれが火星よ

大接近の赤き火星を仰ぎつつ宇宙のロマンに暫し浸らむ

耐え難き暑さと大雨台風とさまざまありて七月が逝く

証

豊川 内藤 志げ

入梅の止りなるかな今日の径黒羽根蜻蛉がひらひらと

ひらひらの蜻蛉は遠くに舞はずしてわれの後はひっそりとあり

猛暑日も4時を過ぎれば東の風涼しい径を知る日もあり

若き頃清水の湧きし藪の下地下水高く黒瓜根付きし

カーナビに探しつつ行く病院は大き建物幾棟となる

勤務中急ぎ足にわが手を引く私はそんなに早くは歩めぬ

死の淵より生きてる人は長生をするよ認知の先生今日のお言葉

休みとて食事に誘う娘なり残りの薬を数して帰る

薬など大した効めのあるでないよ人との会話を多くもたれよ

決められし時間に娘の車を門に一分待たずに黒い車が

目覚めたりシニアカーにてキャベツに水を朝の風の心地よきかな
歌の師よりあの世に行くまで楽しく生きよこの世に生きた証となるに

高温

横浜 阿部 淑子

世界中が極端な異常気象なり驚く高温地図は赤塗り

二つ^{ふた}なる高気圧が重なりて四十度ごえに空気湧く

外出は危険といわれ老の身はクーラー頼りに水飲み努む

夏休みに賑わうプールの水熱く泳ぐ子達の声無く淋し姿

近海の海水温度も上昇し台風本土を狙う怖さよ

十二単衣

東京 今泉 由利

今も今も十二単衣を召されゐて日本守らるる姫君のあり

阿と吽の狛犬の間を通りゆく次第次第の素心に至る

空低き大きな火星にま向へり五七五九万キロの距離をし偲ぶ

大火星に驚く江戸人浮世絵に今日の我窓大火星あり

江戸を発ち京都までゆく浮世絵に有松紋りにひと休みして

八代の將軍吉宗の面影ここにあそこに飛鳥山登る

ふじ川を過ぐれば次は大井川水嵩増せど難なく過ぎぬ

日本を上手に生きし姉なりき日本を下手に生きゐる妹

黒雲のぼっかり割るる一瞬に青空見えき今日の仕合せ

露草の花の滴に描きたり下絵ははやく水に溶けゆく

ジャガ芋

春日井 清澤 範子

八十七歳前立腺ガンの身体からだにて菜園頑張る夫に感謝

腰痛をかばひながらも吾が夫は手塩にかけてジャガ芋を作る

台風の間を待ちて菜園の夫の作りしジャガ芋を掘る

ジャガ芋を計れば十kg掘り上げて夫も満足吾も嬉しき

ジャガ芋の料理続きぬ夕餉には家族の好物肉ジャガつくる

玄関の青き鉢には百日草ダリアを植えて心安けし

青き鉢にダリアを植えるその土に額の汗がしみてゆくなり

今年は台風多くおそひ来し夫との菜園むつかしくして

エアコンを入れて読書も進みをり三河アラギ繰り返し読む

秋田米「めんこいな」を買わむとて娘運転の車に乗り込む

あの日

豊川 安藤 和代

食べる事も会話も出来ぬ夫なれど吾が足は今日も夫へとむかう

院内は看護師の声朗らかに千羽の鶴が風にゆれいる

五合の酒にも乱れぬ若き日の夫よあの日よあの時よ来よ

友の話聞けば私の苦労など苦労と言えず奥歯かみしむ

毎年に聞こゆる声よ牛蛙心待つ窓ふみ月の雨

実る日を思いてゴーヤの苗二本赤子抱くよう土をかけゆく

一日に五センチ伸びるゴーヤ蔓葉陰に早も小さき実三ツ

あかときの石巻山はぼんやりと青田抱きて静もりの中

熱帯夜明の四時はやゝ涼しジョギングしている犬と少年

義姉の死を悼むか今日の涙雨柩は重く雨の中ゆく

月明り

東京 森岡陽子

地球から三年半のはやぶさ2の軌道を惟りリュウグウまで

はやぶさ2帰還するのは三年後五輪の終る東京までを

オフサイド細かいルール分からずもただただ応援ゴールの声に

万緑の真中に一人佇むは生命力と常若願う

仰向けの皮だけ残る雨蛙誰が残るや自然界生きるは

紫陽花にひでりの間間の通り雨葉隅に届かぬままに乾きぬ

月明り私の部屋の十二時は一人のために射し入る眩し

蝉時雨こよい賑わす蝉時雨私は静かに火星を眺む

足を止め頭を下げる山門の御不動尊の階段は急

この夏の生活見える回収日ビールの空き缶カゴからあふる

花壇の野菜

豊川 白井 信 昭

我らが『三河アララギ』誌豊橋の中央図書館おかれているをしる

豊川の市民プラザの喫茶店に中央図書館の静寂やよし

いついくつ迂回路にまむかふ御堂山の青いつしか定まり

門までの花壇に育つ野菜達。ピーマンパセリナスとあわせ九本

アオジソもピーマンも共に白花さきつつ虫に食われき

プランターにアオジソ二本消毒のかいなく終にかれてしまえり

車庫の奥額紫陽花がくあじさいのさき盛る紫の色移ろいいつつ

ま夏日のグラジオラスの朱の色花壇を彩る今がたけなわ

スーパールの弁当並ぶおにぎりを包む黒海苔のりにまじる青のり

西日本豪雨の荒れしあと十二府県に及ぶ一大事

災害

大阪 伊藤 忠男

災害に欠かせぬ今やボランティア手袋タオル長靴に水

茫然と立ち尽くしたる人家前玄関どこか聞く人も無し

丘に立ち見つめる平地ここどこか目印すらも流されて無し

豪雨過ぎ台風一過生々しなのに夜明けかまた陽が昇る

猛暑越え酷暑に激暑炎暑とて言い尽くせぬがこの夏のこと

命にも関わる暑さ未経験今日も記録に挑む夏空

豪雪に豪雨高温竜巻と世界飲み込む温暖化のつけ

年中の行事化なるかこの悪夢防ぐは人の叡知あるのみ

今の世に三災問わば人災に天災加え国災があり

埼玉にこちらは群馬ここ栃木ポーズを決めて記念撮影

不在

蒲郡 杉浦恵美子

今はもう浮世の話題を語るにも不在八年我が身に響く

思ひ出は我が主観にて本当の夫の気持がわからぬわびしさ

有り余る時間に想ふは夫のこと語り掛けても返事はないが

僅か五人地蔵の倉庫に寄合ひて大祭準備の相談始む

心太みたらし団子はやるけれど子供が来ない菓子は減らそう

地蔵盆参拝客も減り続け話し合ふにも溜息ばかり

村角にひっそり佇む鐘鑄場地蔵守ると云ふこと尊く重い

我が父が何十年前に墨書せし大祭の案内倉庫に残る

坊主頭バイト初日か棒読みの料理の説明微笑ましく聞く

梅雨明けの鮎に引かれて大垣は訪ふに近いが帰りは延々

南 瓜

豊川 山口千恵子

老人の行方訪ねる放送ありわが齢と同じその人思ふ

すすくすく笹竹の子伸びはじめ一本のみ残し根本より切る

百円のコイン三枚投入し無人精米所に米搗き始む

ニガウリの黄色の花は雄花ばかり蔓を分けつつ朝見てゐる

蔓先にやうやく見つけし小さき実ゴーヤのごつごつ青き実うれし

掃除機の透明パックの綿埃多き埃の中に住むわれ

ずつしりと大きくなりし南瓜とる少し未熟なるかと思ひつつ

半分にしたる南瓜の切口は鮮やかなりし黄色のすがし

記録的な猛暑の続く日々なれど昼すぎになれば花花草草は咲く

咲き終へし月下美人の花殻はだらり垂れをり朝になれば

内藤志げさんに捧げる挽歌 豊川 夏目勝弘

五十年余を休むことなく作りこし短歌の数は六千首余に

農に生き内助の功にて家の栄え永久とわなる命となりて生きゆく

夫と共に農することの楽しみを歌にときどき作りてゐたり

出荷するネギを作業場にて準備する夫婦の姿浮びくる歌

初孫の生まれし喜びの歌多しはや十数年の過ぎてゐにけり

ノブドウの実をひたすらに集めに回わり己が病を癒さむために

志げさんの作る歌は田畑の仕事そして家族を思う数かず

畑仕事できずになりて朝な夕な親しみ仰ぎしは本宮の山

志げさんが畑にて取りて手渡しくれしピーマンは今朝の一つで終りとなりぬ

とこ永久とわの御魂みたまとなりて還り行く先は病やまいなど無き花園なりき

梅雨もまたよし

豊川 夏目勝弘

細さいの桧の落葉の小道を行く鉄路が遮る行き止りの道
音もなく風に降りくる桧の落葉丸刈り頭にそを感じつつ
初夏の日を遮ぎる深き桧原道奥へと伸びゐる細き毛物道
細さいの桧の落葉のしき降るも終りに近し見上げる顔に
梅雨ちかき雨の降りつぎ舗装路の桧の落葉を流してくれたり
ユウゲシヨウの草叢なすを切りつめて新たな若芽の出づるを待ちぬ
ネムの葉の目覚めて広がるその上をあまたの淡き紅くれないの花
クレナ斗のネムの花ばな咲き盛る木蔭のわれに薫りとどかず
見上げゐる梅雨空低くなりてきぬ在り所を示すネムの花ばな
アジサイの玉なす青き花のいろ定まることなし終ついの色へと

『いっよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

十葉のま白き花のにほひたち今宵降る雨この梅雨の雨
五十年ぶりに逢ひたる友とお互ひに「すぐ分かった」とハグする我ら

稲 吉 友 江

芝の中小さく赤き花の咲く今日小岩井農場初めて歩む
小学校最後となりし運動会孫はわが顔見ても知らん顔

鈴木美耶子

誘はれて今日は幼の運動会勝利の歓声わが胸に響く
帰り際好みし空間そここに我は意のまま漫ろ歩きする

吉 見 幸 子

今日こそは有馬温泉へのバス旅行今朝は三時に目覚めてしまふ
弔ふはすでに逝きにし三十一人友の名聞きつつただその歳月

牧 原 正 枝

音楽を奏でるやうに間をおきて螢飛びかふ梅雨の夕暮れ
金平糖皇室の方も食むと言ふ今宵は吾もその古都の土産

石 田 文 子

ただ眺むスカイブルーの海と空風吹きぬけるホテルの屋上
風わたる伊良湖の海に赤白の船の泊まるを絵のやうに見る

森 厚子

指先を赤に染めにしこの紫蘇は腰のまがりし老爺作りしと
南極の氷を砕き進みたる「ふじ」は今ここ名古屋港にあり

山 崎 俊子

金蓮寺の国宝の弥陀堂に詣でたり梅雨の晴れ間にわれと娘と
弥陀堂の三尊像の御姿九百年経しと聴きつつ拝む

三 田 美奈子

紫陽花に山吹山椒葉蘭まで狭庭にひしめき陽差しを求む
みやうみやうとか細き子猫の鳴き声もやがて鳥らの囀りに消ゆ

水 野 絹子

自然なる草木を愛でる人ありて人それぞれの庭のありやう
久々に夕暮れの空見上ぐれば上弦の月白々とあり

牧 原 規 惠

現代学生百人一首

東洋大学

キヤスターの三言で終わる死亡事故命の重さが分からなくなる

西武学園文理中学校二年（埼玉県） 清水 理沙

空きの無い電車で独り紙めくる薄闇の窓に数多の端末

今日もまた父と二人で野球観るこの時間だけは素直なわたし

埼玉県立松山女子高等学校一年 長尾 愛^め衣^い

平和ボケしてる私に祖母語る戦の恐怖静かな涙

埼玉県立川越総合高等学校一年 ギラニサラ

図書館に居ずわり気づけば早二時間恋にケンカに冒険もしたな

埼玉県立南稜高等学校三年 山岸 美祐 み ゆ

泣く君の力になりたいだけなのに、どうしてどんどん遠くへ行くの？

芝浦工業大学柏中学校三年 阿部 紗也香

「次期部長」言われたときのしょうげきよ空前絶後の夏休みかな

麗澤中学校二年 大竹 風音 か のん

P Kを背中をむけて見守れば地面がゆれて終了の笛

千葉市立打瀬中学校二年 村上 雄梧 ゆう ご

贈呈誌

森岡陽子

柊 七月号 北陸アララギ会

○嵐あとの花敷く園に立ちおれば後ろの田より雉の鳴く声

川波堯子

○みぞれ降り足元白き石畳コート重ねし卯月の今日は

飯田純子

柊 八月号 北陸アララギ会

○きのふ雪けふは真夏の気温とぞいかなる世かかく永らへて

山田範子

○永平寺は今夏安居の時期にして修業僧らの禁足に入る

加賀要子

鹿児島アララギ 7月号

○花壇へと移植をしたるひまはりは火山^{よな}灰の混じりし雨に萎るる

市来房枝

○梅雨に入り育てし梅を楽しみて梅焼酎と梅シロップを作る

郡山禮子

月虹 122号 6月

○片付けの合間にみつけれし亡き母の礼状の言葉美し優し

山口京子

○新緑の樹樹の間ゆけば細胞のひとつひとつがふつつ湧き来

清水和子

冬雷 七月号

○御嶽の雪解け水のじわじわと滲みゆく田ん圃に蛙鳴き初む

澤木洋子

○ゆずりは若葉鮮らけし伸び伸びといつしか古き葉譲られゐたり

山崎英子

○二八七段上り終へれば境内に香り漂ひしだれ桜咲く

有泉泰子

冬雷 8月号

○登り行く沢沿いすずし水の音梢を渡る鳥の轉り

松中賀代

○作業衣の綻び繕う雨の夜針の運びに母憶い出づ

吉田綾子

○まだ海を見ているような鰹の眼見つち氷詰めにし帰りし日あり

糸賀浩子

○青蛙手すりにじっと動かざりその目の先の虫も動かず

木村宏

ああ武士道

高橋育郎 作詞作曲

己にきびしく たちむかい

人にはやさしく 睦まじく

風雪道を はばもうと

耐えて忍んで 実をとる

ああ武士道 われらの鑑

松はときわぎ 櫻花

竹は節々 たおやかに

地には根を張り 支えあう

いとしさ尽きぬ まほろばよ

ああ武士道 われら讃えん

己の心を 広くして

小事にまどわず 大事とり

行くべき道を 堂々と

おもいを遂げるが 本懐ぞ

ああ武士道 われら極めん

心は熱く 義に燃えて

尚武を尊び 礼を知る

質実剛健 旨として

信義のきずな 和のもと

ああ武士道 われら勤めん

『俳句』

山門にあまた人影大夕立

浜田紀政

高層の窓にくつきり雲の峰

垣越にプリンセスミチコ姿見す

一湾の冥さとともに海桐咲く

松本周二

産土は天竺姫や雲の峰

魚籠の蓋開けて見せたる鰻獲

合歓の花葉の眠るまで遊んだね

重野善恵

夕焼け空雲の織り成すドラマかな

千代紙の着物揺れをり笹の枝に

新しき緑映して滴りぬ

今泉由利

おしろいの花咲き初むる祖母はるか

はななかばちや
花南瓜姿のままの天麩羅よ

髪洗ふ今日逢ふ人を思ひつつ

柳田皓一

夕暮れの色変りゆく晩夏かな

一隅の夏草のばし楽しむや

ガラス張りのビルに映りし雲の峰

山迫京子

風鈴の音色やさしき母の声

人集ふプラチナ風鈴非売品

廃刊の一誌ひもとく夜の秋

山元正規

庭石に残るぬくもり夜の秋

生きるとはのこさるること秋螢

滴りの水かがやくや石不動

森岡陽子

青銅の亀に一服黒揚羽

立役者せり出す見得や雲の峰

八合目眼下に見ゆる雲の峰

田中清秀

大岩を跨ぎ眺むる雲の峰

一望に明け初むる峰夏霞

言ひ訳けはそれぞれにあり遠花火

植村公女

晩年の天辺にをりところ天

ねむの花路面電車に触れてをり

火星大接近の夜のねぶたかな

今泉如雲

伊能図に描かれし道や青芒

大鰐はアイヌ語なりと天の川

木ささげの花のさかりや鑑真忌

杉浦弘

夏萩や十二神将ふためぐり

辻茶屋の高きとべらの花は実に

かさね吟行会

「川崎市緑化センター」 七月

田中 清 秀

二ヶ領（にかりょう）用水の名は江戸時代に川崎領と稲毛領にまたがって流れていたことに由来する。関ヶ原の戦いの三年前に計画され十四年の歳月をかけて完成、全長三十二キロ神奈川県下で最も古く長い用水路である。かつては近隣の農業を支えていたが現在は工業用水などに利用される。今回のかさね吟行会はこの二ヶ領用水を挟んで温室や芝生の広場などがあり様々な植物と触れあえる川崎市緑化センターを訪れた。最寄り駅は南武線の宿河原で、昭和十一年に県の農業試験場として開設され都市の緑化推進を目的に樹木の見本園、種苗の収集保存と併せて緑の相談所としての役割も行っている。四季折々の草花が咲き、樹木が生い茂り、特に市民の木として親しまれているツバキが二百種も植えられている。今はシランやナツツバキなどに併せて食虫植物の展示が行われていた。

ハーブ園炎暑にまじる香りかな

素山

緑陰や木造椅子と絵本箱

恐竜か夏野菜かとゴーヤ生り

陽子
由利

用水の水面に水馬（あめんぼう）が水を切って泳いでいた。脚先には短い毛が密生しており、その毛が水を撥き表面張力で浮かび滑走する。捕まえると臭線から飴のような臭いを発する、子供の頃摘まんで遊んだ思い出があり郷愁を誘う昆虫である。

六足に光の沓の水馬

木洩れ日や小川を上るあめんぼう

周二
紀政

蜻蛉は秋の季語であるが川蜻蛉やおはぐろ蜻蛉は夏の季語で、小形で透明な姿は水辺の草むらでよく見られる。糸蜻蛉は四枚の翅をひらひらとさせ枝先に止まると翅を背中に合わせて。体の形から燈心蜻蛉ともいう。昔、捕らえた蜻蛉を指に挟んで得意げに楽しんだ。話は変わるが戦国の武将織田信長の兜の前立てはトンボの飾りだったと記憶している。奇抜な紋様を好むこともあるがトンボは別名勝ち虫といい、前に進むが後退はしない、また、同じ道に戻り来る習性もあるらしい。命を賭けた戦であればこそ、そんな縁起をかついだ前立てに思いを託す武

将の気持ちも理解できる。

とうすみに流れの早き水路かな

正規

気の向くまま風の向くまま川蜻蛉

京子

おはぐろの川面すれすれ身をかわし

さち子

今年の夏の暑さ凄まじい、一部に四十度近い猛暑を記録した地域もある。また、関東では梅雨明けがかなり早く、西日本では大雨による洪水など甚大な被害が出ている、正に異常気象である。人間だけでなくこの暑さの影響は動物にも有る、ペットの犬も熱中症になることが知られている。また、動物園のライオンやサル、ゾウたちも連日の暑さで大変だろう。さらに公園の昆虫も樹木の隠れていても暑いに違いない。異常気象が人間社会の温暖化の影響とすればいい迷惑だ。

初蟬の小さきしぐれは何の蟬

皓一

夏蝶の翅を休めるたまり水

清秀

蟬は鳴く昆虫の一つとして親しまれている。季語としては初蟬、蟬時雨、夕蟬、油蟬等々が夏の情景を表すのに多く使われている。蟬の幼虫は地中に潜り込み樹液を

吸いながら十年以上も生活すると言われている。その後地上に出てきて羽化を行い見慣れた体色の蟬となる。また、鳴くのは雄のみで求愛行動で飛びまわる。成虫の蟬は八日しか生きられないと言うのは都市伝説で、本当は一ヶ月程度生き延びるらしい。褐色の固い殻で暑い夏を過ごすのも大変だ。

散策後の句会は当センターの会議室で行い、エアコンの効いた室内で植物や昆虫の見本を見ながらの句作となった。いつもの様に囁目三句出し四句選で行われ、真夏の暑い吟行会も無事にお開きとなった。

■かさね吟行会■

日時 九月十四日（金）

場所 自然教育園

集合 山手線目黒駅

地下鉄白金台駅一番出口 現地集合

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（七七）

丸山 酔宵子

『弾丸！西南四国縦断』

羽田を早朝に発って松山空港へ。梅雨の晴れ間の松山は雲一つない青空が広がり、9時前とは言え、真夏のような太陽が容赦なく降り注いで来る。松山空港からレンタカーで足摺岬を目指し、翌日は四万十川、高知と将に弾丸！西南四国縦断である。

松山自動車道で宇和島そして国道56号で山越えし、宿毛を経て足摺岬に向かう。曲がりくねったカーブの続く尾根伝いに、遠く海を臨みながら慌ただしく登りそして下る。四国の山々は、深い緑に包まれ、所々に紫陽花が瑠璃色に輝いていて美しい。途中エメラルドの海が広がる透明度抜群のサンゴと熱帯魚の柏島で小休止。

土佐宇和海国立公園を海沿いに、ひたすらくねくねと進んで行くと、足摺岬入口のジョン万次郎の大きな銅像

が見えてくる。その下には四国最南端の地の断崖に建つ白亜の灯台があり、眼前に270度にわたって遮るものが無い太平洋が洋々と広がっている。灯台の眼下には花崗岩で形成された岩盤が波の浸食により洞門となった日本一の白山洞門が聳え立って、荒波が打ち寄せている。この地から14歳のジョン万次郎は漁に出て漂流、数奇な波乱万丈の人生が始まったのである。

ジョン万次郎記念館のある足湯の前には四国最南端四国霊場88ヶ所巡りの第38番札所金剛福寺が、大海に向かって威容を誇っている。霊場札所間の距離が最も長い場所にあり、金剛福寺までの道のりは遠い。因みに、第37番札所岩本寺から約90km、第39番札所延光寺へは約60kmもあるのだ。白装束のお遍路さんが金剛杖を巧みに動かしながら、想像以上の速足で通り過ぎていく。

『ジョン万次郎をNHK大河ドラマに！』と、大きな看板が足摺岬周辺の主要道路に建っている。ジョン万次郎の幕末期の活躍と業績についてはいろいろな本で知っていたつもりだが、今回新たに知った事実があった。

ジョン万次郎が船長の援助でサンフランシスコで学校に入り航海術など勉強卒業後、故郷土佐への思いが強く帰国を目指すのである。その為にはお金を稼がねばと、ゴールドラッシュの鉱山で必死に働き、土佐へ帰るための小型帆船を買ったのだ。

当時まだ鎖国中であり、外国船は日本に接岸すらできないため、サンフランシスコから上海航路定期船に、購入した帆船を積みこんで太平洋上で下船し、自前の帆船で土佐に戻ったのである。であるからして、その後の土佐藩及び江戸幕府の取り調べは厳しくかった。その後、咸臨丸に通史として乗り込むのはそのあと数年たってからなのである。

長い一日、夏の太陽が地平線に沈み、夕焼けに染まれる太平洋を見ながらの足摺温泉露天風呂が心地いい。さあ、いよいよお目当て鰹のタタキである。鰹の表面を藁の強火で炙り、冷水で身を締めたタタキは勿論だが、今日は黒潮に乗った旬の鰹を極上の「天日塩」をふり、軽く叩き込んでなじませた塩タタキで……。玉ねぎやに

んにく、小口切りにしたネギとともに一口運べば、鰹の旨みがふわりと口の中に広がり、地酒土佐鶴が心地よい。

万次郎故郷（ふるさと）恋いし塩鰹

酔宵子

ある自然科学者の手記(73) 大橋 望彦

『褥瘡(ジヨクソウ)』

褥瘡とは、^ゝ床ずれ^ゝとも言われ、昔から有るゲジュグジュした感染症の皮膚病のことである。既に、この名称は消えているのかと思っていたが、先日、東京青梅市立総合病院に入院した際に、意外にも厳しい check があり珍しい経験をした。兎も角、一昼夜の間に何回か数えきれないほど寝返りを打たされるのである。自分で出来ない患者の場合は、看護師など二人の介助により「イチ。ニイ、サン！」と掛け声で身体の向きを回転し替えさせられるのである。

褥瘡^ゝというと、小生が癌研究所から、創立勅語の東京都老人総合研究所に転職して直ぐに知った言葉であるが、老年病者に極めて高い罹患率を示す一種の皮膚感染症である。都老人研の生理学部部長であった故入来正躬博士がその方面で詳しいので、研究所内で、プロジェクト・チームが生まれ、その成果が出版物として廃刊された。

この「褥瘡」の本によると、一番大切なのは、清潔に

すること、シーツを頻繁に替えることと、清拭を繰り返すことで可成り予防することが出来ることである。何か抗生物質のような薬物などの特効薬がないのか調べても、これという薬物が知られなかった。

と、思っている矢先に、カーテンが開き、あまり常には顔を出さない看護師が、「今度は向こう側に体位を替えてー」と命令調に言って、ジイーとこちらの行動をみている。一瞬、^ゝここにも^ゝ鬼軍曹^ゝがいると、驚いたが、「ハイハイ」と、おとなしく向きを替えた。が、カーテンが締まるや否や、また向きを替えてしまった。ネット検索で、早速調べることにした。

驚いた事に、褥瘡発生の危険因子としてどんな疾患が挙げられているかというと、十四・五種の老年病といわれるものの大部分が指摘されており、なるほどと思いつつも、やっぱりとも思わされる。寝たきりなどにより、体重が^ゝ一か所に長い間、集中して加わり皮膚の一部が炎症を起こしたり、所謂^ゝ床ずれ^ゝを起こしたりする現象を総じていう疾病であるので、昔からある疾患であるが、現在までに、殆どどの対症療法が変わらない。新しい薬も特効薬として存在しないし、抗生物質もないと改めて、50年も以前に纏められた、小冊子が既にその多くを紹介してあることに敬意を表するものである。

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

君待つと吾が恋ひ居れば吾がやどの簾動かし秋の風吹く

君待登 吾恋居者 我屋戸之 簾動之 秋風吹(④四八八、額田王)

(口訳) 君のおいでをお待ち申し上げると、恋しく思つて居ますと、吾が家の戸口の簾を動かして秋の風が吹いて
います。

題詞に「額田王思二近江天皇一作歌一首」とある。即ち額田王が天智天皇をお慕いして詠んだ作である。王は始め大海人皇子(天智天皇の弟)の寵を受け十市皇女を生んだが、後には天智天皇に召されその寵を受けた。この歌には既に近江に移つて後の作と思われる。別に口訳もいらぬ程、淡々と詠み下されている歌である。それでいて、一首「秋の風」と言つても後世の歌のように「秋」に「飽き」をかけると言つた知功もなく、天皇を思慕し奉る溢れるような情感と、簾動かすかそけき秋の風とが一つに融合して、言はば対象即心として表現されている。秋風にゆれる簾は、即ち王の心のゆらぎすら象徴している感がある。額田王の作には一般に才気のひらめきを感じるのであるが、この作はそうした点も奥にかくれて、静閑に徹した底に湧くとも言うべき女性らしい温雅豊潤な情緒が自ら流露している秀作である。因みにこの歌の結句も万葉的な声調で、後世ならば「秋風の吹く」とか「秋風ぞ吹く」とかなるのが一般である。拙歌「大山寺越えてし来れば和氣の浜に冷たき秋の伊豫の風吹く」「夕づきし伊良湖の海の潮風は我を訪ひ來し君が髪吹く」等の結句もこの万葉の声調に負うものである。

「江上浩二の独り言」 9

江 上 浩 二

オリンピック前の北京 ①

今から11年以上も前のことで、かなり社会事情が大きく変わっていると思いますが、

2006年11月26日ー30日の間仕事で、初めて中国北京に行ってきました。仕事以外で感じた今の中国（2008年8月8日のオリンピック前のことです）や、私の先入観を引き裂いた体験などをお話したいと思います。

1章…中国企業、町並みは予想以上の活気

このテーマについて、少しお話ししたいと思います。天候は非常に乾燥していて、今の時期東京の冬といった感じでした。黄砂もそれ程ひどくなく、遠くの山も見えました。以下、食、町並みについての体験の話です。

庶民のラーメン店で昼食を取った。値段は80円、これが普通だそう。5円で済ませる人もいるそう。スープは日本と言う醤油ベース、麺の太さは細い、太いがあって、細い方は長崎ちゃんぽんの麺ぐらいで、日本の極細ではない。太い方は平たく名古屋のきしめんにそっくりだった。道端の屋台では2元くらいで具を小麦で焼いた皮に包んだようなものが売られて、大きいもので、これ一つで昼食には十分。1元は約15円。

北京ダックの鴨は特別に育てられており、有名店では生まれて育てられた経歴を示すID証明書をくれるシステムもあ

る。北京ダックは皮だけでなく、身、内臓全て料理してくれる。皮もパリパリが良いのではなく、皮下脂肪たっぷりと育てられ、食べる時脂が口の中でしみ出るくらいである。その店は国営で1950年代に共産化した時に民営店が買収されて、今でもコックさんは夜8時に帰るが、即閉店にはならない。新規注文は出来ないが、それまで注文した料理は出される。食べきれない残り物はアメリカと同じようにパックに入れて持ち帰る。

自転車は意外と少なかった。バッテリーの電動補助自転車もかなり見かけ、上下に交差している道をすいすいと上ったり、下ったりしていた。今や北京は車社会。でも買える人は相当な収入が必要。日本車はそれ程目立たない。欧米の外車（高収入の人や高級役人）、韓国車が目立つ。北京市内のタクシー会社は大手4社、車は政府が韓国現代と優先的に契約して、形、色が統一されて、安く買っているという。日本の小型タクシーと同じサイズ。アメリカほどではないが、運転手を守るために透明な枠が後ろと横に設けられている。基本料金は10円で、日本の10分の1くらいの感覚。

市内の道路事情は悪くないが、車社会なので朝晩はちよつとラッシュになる。道は真真中に何時も流れている本線があり、路地に入り込むための側道があり、これでも日本の2車線の道くらいあり、そこへ先ず本線から出て、さらに側道をゆっくり走って、目的の路地などへ曲がっていく。アメリカと同じ右側通行で、人も車も信号は無視して、渡れる時に行ってしまう。信号の数は少ない。

2008年のオリンピックに向けて今ある市内の地下鉄に加え、複数の路線を工事中。

北京市内から北東に位置する国際飛行場に向かって今ある市内の地下鉄に新しい高速道路があるが、もう一つの高速道路と鉄道の新設が行われている。今の地下鉄の料金は3元、乗換えがあると4元コース、5元コースと分かれており、紙製の切符を窓口で購入して、駅員に半券をちぎってもらいます。最新のICを埋め込んだものは毎日通勤で使うような人が購入できます。しかし、出口で切符を回収するわけでなく、どこへ行くかは申告制ですよ。

2章…生活

所謂スーパーに買い物に行く時は、客は自分の手荷物を持って店の中には入れない。ただし、入り口に無料のロッカーがあり、警備員がいて注意される。店内に入っても、簡単に出入りできない。再入場するにはレジを一回通っていく必要がある。レジの出口のわざと狭くしてあり、盗みを防ぐシステムになっている。品物は魚、肉、果物等々豊富であった。知り合いと店に入って買い物を買ませ、そのロッカーへ戻ってくると、もう警備員は変わっていた。

地下鉄の駅の話でも、日本でいう昔のような薄い紙に印刷された切符を売る売り子さんは女性、その切符を持って入場口へいくと、映画の切符もぎをする方も女性、階段を上っていくと数人の警備役らしい人がいる。女性、男性が混じっている。

市内では電車・バスといった大量に運べる公共交通機関が

少ないので、タクシーが非常に多く市内を走っている。基本初乗りは（日本風）10元、これでかなりのところまでいける。国際飛行場から市内まで行っても100元ちょっと（1500円）、これは日本人にとっては安い。タクシーの運転手も相当働いているだろう。タクシーの運転手さんの稼ぎには日本に無い仕組みがある。雇われていても、月に車1台分の上納金を納めれば、それ以上稼げば全て収入になるという。ポーナスではない、自営業的売上、稼ぎになる。したがって、サービスもいいという。住宅地近くでは必ず決まって出かけるときにはご指名のタクシー（同じ運転手）を利用するようだ。

何が言いたいのかというと、社会システムが機械、自動化でなく、人を出来るだけ多く使うようなシステムになっていることです。

ちよつと上のランクの集合住宅（マンション）では、敷地はアメリカのように塀で囲われていて部外者は入りづらい。入り口と敷地のあちこちに厚いコートを羽織っている寒い冬でも外で立っている若者の警備員がいて、住んでいる人は毎月そこそこの金額の管理料をそのために支払っているという。それだけで数千円も払うという。警備だけでなく、大きな荷物を持っていると運んでくれるそうだ。一つの敷地のマンションには同じ地方出身の若者達が仕事につくという。お互いに話が通じて分かり易いそうだ。しかしこのような新築マンションとベンツが走る大通りの間に路地が残っていて近郊の農夫の爺さんが大八車を引いて野菜を売り歩いている光景にも出っくわせる。

絹の話 (94)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹の二重織ストールで重ねの色を染める

野蚕、家蚕生糸の光沢の差を利用

野蚕と家蚕の生糸（紡、紬糸ではありません）はそれぞれ光沢が異なります。

一般に野蚕糸は草木で染まらないと言われますが、家蚕の生糸と比べると、ややうすく光沢のある品の良い色に染まります。

野蚕と家蚕絹の薄地を重ね袋織りにすると、片面は野蚕、もう片面は家蚕の二重織が出来ます。

この素材を草木（茜、藍、ログウッド等）で染めると家蚕絹はしつかり濃く染まり、野蚕絹は少しく染まります。うすく見えるのは、糸の形がおにぎり型をした家蚕絹より野蚕絹（ヤマユガ科）の糸は扁平型なので光が乱反射され、吸収された一部の光が家蚕には見られない多孔質構造により、さらに複雑に乱反射され、吸収された時と違った、やや紫色波長の光となって糸の外に放出されるので、人の目には染まりが悪いと見えるのです。

この濃淡別々、二枚重なった色艶は不思議な色彩の世界に人を魅惑します。

この微妙な色の変化、見る角度による彩度の違いに誰もが驚かされます。風に揺れば違って見えるのです。

構造色

色には染織色と染めないでナノ構造の物質の幾重にも重なって発色する玉虫の羽根の様な構造色があります。染織色は時間とともに退色してゆきますが、構造色の退色はありません。永遠の艶なのです。

勿論、絹はナノ構造物質に比べはるかに大きな物質ですが、織度の細い絹織物を二枚合わせる事は、野蚕と家蚕の糸を一枚に織ってもその効果は見られませんので、ほんの少し玉虫の羽根に近づいていないでしょうか？

薄絹を着る

今も昔も女性には薄いものが好きなようです。

古来中国の高貴な女性には厚手の錦織の上に蝉の羽の様に薄い絹を着る事が『綺麗』だったのです。

（綺…上質な薄手の絹織物―無地や先染めの文様織り、麗…鹿の群れ―奈良の都に多くの鹿を遊ばせた所以？）

平安の昔は生地を柄をうまく定着させた染織が出来なかつたようで、色の表現を重ねの色で表現しました。白に白を重ね「雪重ね」ピンクにピンクを重ね「桜重ね」といつて、その濃淡で着る人の趣味教養を競つたと云われています。まさに十二単はそのための重ねなのです。

今日でもスカートやパンツの上に寒い季節でも薄い無地のチュールの様な素材を着ている人を見かけますが、いずれも合わせる素材がミスマッチですので、綺麗には及ばないどころか、何か気の毒のようにも、また悲しくも見えるのは私だけでしょうか？

二重織草木染めストールの販売

草木で染めた無地の家蚕とタサール蚕の生糸の二重織のストールは女性の最も好む柔らかさに出来ているにもかかわらず、シンプル過ぎて人目を引かないのか、以外に売れません。

ときとして目にとめ、「こんな色艶の物に出会えて幸せ」と、狂喜して求めて下さる人がいる反面、勧めてもあまり反応しない人も多くいます。

このデリケートな作品は、主たる光源が光の波長の短いLED電球のもとでは美しさを増しません。

ですから、最近の百貨店ではLED光源では絹が売れ

にくいように、このストールも精彩を放ってくれません。売場にハロゲン球の様な太陽光に近い光を入れると、一気に花が咲きます。デパートの繊維商品の殆どは化学繊維で、化学繊維はLED光源で美しく見えるので、絹の為に光源を換えようとはしません。

色艶は人それぞれに見えている

光の波長は夕日の赤さや薪能の光の揺らめきを引き合に出すまでもなく、人の感性を大きく左右します。

しかし人の目の色彩を識別する錐体は人それぞれに細分化された進化をしているようで、現代のホモサピエンスは夜行性哺乳類の時代の2錐体（白、黒識別）から3錐体（多色識別）に進化し、それからさらに進化して4錐体に近づいている人も若干いるようです。

この3錐体を超えた人達の中にはこよなく美しく見えるのではないかと思われまふ。

色の好みの判断は人の目の進化と光の波長や時代の道徳律（日本では侘び寂びが美意識の中に取り入れられてより大きく色彩の好みが変わりました。草木染めの基本はなんとかして原色を染めようとして来た歴史です）に左右されて、人それぞれ、十人十色とは良く言ったものです。

楽しい時間 70

山本紀久雄

2018年7月31日

鉄舟の禅弟子・三遊亭円朝

まず、最初は前号に続く『山岡鉄舟』（大森曹玄著）による鉄舟の武士道解説である。

『鉄舟が武士道と呼んだ人間の道は、忠とか孝とか、仁とか義とかいう既存の徳目の一つ一つを対象的に実践することではない。その底を貫くというのか、それらを超えて包むというのか、とにかくそれらの相対的な一々の徳目を成り立たしめる根本原理を体得し、実践することを行っているのである。それを一言にして言うならば、その根本原理が「無我」なのである。『禅に徹し、一切に自在を得た鉄舟の武士道とは、実にこのような人間としての根源的な大道を把握して、それを日常生活の上に無礙自在（捉われることなく自由自在）に実践することであった。まことに鉄舟は一介の武弁（武士）ではなかったのである』

大森曹玄氏は、見事に的確なる鉄舟武士道を解説されている。

この鉄舟に落語界の実力者である三遊亭円朝が、明治5年（1872）にそれまで専門として展開していた芝居噺をやめ、素噺一本に転じ、噺の根源思想を禅に求め、明治10年（1877）に鉄舟門下となった。

円朝は天保10年（1839）江戸湯島生まれ、30歳までを江戸期、明治33年（1900）62歳で亡くなるまでを明治期であるから、ちょうど維新を境に半々の人生を過ごしたことに

なる。

維新当時の円朝は、江戸っ子を任じ、単純な徳川臍原の心情から逃れられず、一方で急激な「欧化主義」に戸惑って、そこから打開すべく鉄舟から禅指導を受けたのである。

円朝は師の鉄舟について「塩原多助一代記」の続編「塩原多助後日譚」で次のように語っている。

『円朝が深く、この臍原を戴いた山岡鉄舟先生が常常ご教訓のうちに、人の幸福はともに喜び、人の困難はともに憂ひ、自他の別なく心の平等なる人を神とも仏ともいふと仰せられました。が、この塩原多助は奉公人でも主人でも自他の別なくその憂ひはともに憂ひますので不識（しらず）不識天の恵を得て僅のうちに名高い金持になりました』

『塩原多助後日譚』は明治末年に焼失したと言われていたが、平成11年（1999）に芸能史研究家の倉田喜弘氏が発見し『圓朝の世界』（『文学』増刊号2000年）で発表し、この中で倉田氏が読後感を述べている。

『塩原多助後日譚』を読んで、円朝観は一変した。主人公の多助は、円朝その人ではないのか。山岡鉄舟に禅を学んだ円朝が晩年に到達した境地、それが「後日譚」に結実している。理屈はさておき、まず読んで頂きたい。円朝は凄い。そう叫びたい衝動にかられるのは、わたくし一人ではあるまい』

このような修禅によつて、円朝は、社会環境の時流変化に適応した生き方へ転換し、正に、鉄舟の『剣術の流名を無刀流と称する訳書』に書かれた世界、過去・現在・未来の三世から一切の万物に至るまで、何一つとして、心でないものはない。心というものは痕跡を残さないものであり、自由自在かつ無尽蔵である。東に現れ出るかと思えば西に消え、南に現れれば北に消える。まさに神変自在、天も予測することはできない』

にたどりついたのである。

円朝の創作した作品は、「怪談噺」「伝記物」「翻案物」「芝居噺」「人情噺」「北海道取材作」「落語」と大きく7項に分類でき、単なる落語家としての域を超えているが、この中から代表的な三つを選んで説明したい。

一つは「怪談噺」である。安政6年（1859）から創作し始めたのが『真景累ヶ淵』をはじめ、江戸期の人々に深く入り込んでいる因果関係を、明治に入ってから『怪談乳房榎』などを人間絵図として創り、それを天才的ともいえる舌三寸から語り続けた。

二つめは「伝記物」である。

維新の大改革で江戸っ子は日常生活習慣を変えさせられ、地方からの移住による人口増加もあり、江戸は「雑多な東京」となり、その中で多くは、新しい時代の生き方をどう組み立てればよいのか戸惑っていた。特に地方出身者は、慣れない環境で、いかに生活を成り立たせ、豊かになれるのか。その方策や指針を求めている。

そのような情勢下、円朝は、維新政府の改革変化にクレームをつけるのではなく、それらを包み込む「新しい時代の生き



方」として「塩原多助一代記」と「塩原多助後日譚」に代表される立身出世物語を示したのである。それは当時の人々に広く受け入れられただけでなく、政府からも支持され、ついに明治25年（1892）には修身教科書に取り上げられ、今でも（2012年10月）に国立劇場で上演されている。

三つめは「翻案物」である。明治16年（1883）に鹿鳴館が開館されたことで示された時の欧化政策、その影響から外国に関心を持つ新しい読者層が増える動き、これを素早く取り入れ出版したのが明治18年（1885）の『英国孝子ジョージ・スミス伝』である。その冒頭部分を紹介する。

『御免を蒙りまして申し上げますお話しは、西洋人情譚と表題をいたしました、英国の孝子「ジョージ・スミス伝」の伝、之を引続いて申し上げます。彼国のお話しではどうもちと私の方にもできかねます。又お客様におわかりにくいことがありますから、地名人名を日本にしてお話しをいたします。英国のリバプールと申しますところで、英国の竜動より三時間で往復のできるところ、日本でいえば横浜のような繁盛な港で、東京で申せば霊岸嶋鉄砲洲などの模様だと申すことで、その世界にいたしてお話しを申し上げます。スマイル・スミスと申します人は、あちらでは蒸気船の船長でございます。これを上州前橋立町の御用達で清水助右衛門と直してお話しをいたします。その子ジョージ・スミスは清水重二郎という名前にいたしました……』

臨機応変、縦横無尽というのか、鉄舟からの修禅によって、円朝は時代の機微を鋭くとらえ、機敏さと柔軟性を發揮し、名作を創作し続け、三遊派一門の復興を図り、芸人の社会的地位をも向上させたのである。未だに円朝名跡を受け継ぐ落語家は出現していない。

漢詩研修（二十三）

千代田岳精会 平井茂行

奥の細道（平泉の節） 松尾芭蕉

諸も義臣すぐつて此の城にこもり

功名一時の叢となす

国破れて山河あり

城春にして草青みたりと

【作者】

芭蕉・本名松尾宗房（一六四四・正保元～一六九四・元禄七）江戸初期後半に活躍した。伊賀上野（三重県伊賀上野市）に生まれ、十歳頃領主藤堂新七郎の子良忠に仕えた。この良忠（号・蟬吟）が俳諧をたしなむことから、芭蕉も俳諧に興味を示した。良忠の師が季吟（貞門派）だったので、芭蕉もはじめが貞門派の俳風を学んだ。良忠の死後、江戸へ出た芭蕉は貞門から談林派へ移り、やがて自己を見つめる薫風へ発展して行く。人生を旅と考え、旅の実践によって誠の芸術を求め、わび・さび・かるみの理念を樹立した。

笠^{かさ}打^{うち}敷^しきて 時^{とき}のう^うつる^るま^まで
 涙^{なみだ}を^を落^おし 侍^{はべ}りぬ
 夏^{なつ}草^{くさ}や 夏^{なつ}草^{くさ}
 兵^{へい}ど^ども^もが^が 夢^{ゆめ}の^の 跡^{あと}
 兵^{へい}ど^ども^もが^が 夢^{ゆめ}の^の 跡^{あと}

『俳聖』松尾芭蕉 奥の細道と夏の句

中屋保之

(平泉 元禄二年五月十三日)

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。先高館にのほれば、北上川南部より流る、大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。泰衡等が旧跡は、衣が関を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偕も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠打敷て、時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛哉 曾良

兼て耳驚したる二堂開帳す。経堂は三将の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散うせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既頽廃空虚の叢と成べきを、四面新に囲て、薨を覆て風雨を凌。暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂

(立石寺 元禄二年五月二七日)

山形領に立石寺と云山寺あり。慈覚大師の開基にして、殊清閑の地也。一見すべきよし、人々のすゝむるに依て、尾花沢りとつて返し、其間七里ばかり也。日いまだ暮ず。麓の坊に宿かり置て、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松栢年旧、土石老て苔滑に、岩上の院々扉を開て、物の音きこえず。岸をめぐり、岩を這て、仏閣を拝し、佳景寂寞として心すみ行のみおぼゆ。

閑さや岩にしみ入る蟬の声

（大石田・最上川 元禄二年五月二八・二九日）

最上川のらんと、大石田と云所に日和を待。爰に古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花のむかしをしたひ、芦角一声の心をやはらげ、此道にさぐりあし、新古ふた道にふみまよふといへども、みちしるべする人しなればと、わりなき一卷残しぬ。このたびの風流、爰に至れり。

最上川は、みちのくより出て、山形を水上とす。ごてん・はやぶさなど云おそろしき難所有。板敷山の北を流て、果は酒田の海に入。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。是に稲つみたるをや、いな船といふならし。白糸の滝は青葉の隙々に落て、仙人堂、岸に臨て立。水みなぎつて舟あやうし。

五月雨を集めて早し最上川

（象潟 元禄二年六月十五・十八日）

江山水陸の風光数を尽して、今象潟に方寸を責。酒田の湊より東北の方、山を越、磯を伝ひ、いさごをふみて其際十里、日影や、かたぶく比、汐風真砂を吹上、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫作して「雨も又奇也」とせば、雨後の晴色又頼母敷と、蟹の苦屋に膝をいれて、雨の晴を待。其朝天能霽て、朝日花やかにさし出る程に、象潟に舟をうかぶ。先能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸に舟をあがれば、「花の上こぐ」とよまれし桜の老木、西行法師の記念をのこす。江上に御陵あり。神功皇宮の御墓と云。寺を干満珠寺と云。此処に行幸ありし事いまだ聞ず。いかなる事にや。此寺の方丈に座して簾を捲ば、風景一眼の中に尽て、南に鳥海、天をさ、え、其陰うつりて江にあり。西はむやむやの関、路をかぎり、東に堤を築て、秋田にかよふ道遙に、海北にかまえて、浪打入る所を汐こしと云。江の縦横一里ばかり、倂松島にかよひて、又異なり。松島は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越しや鶴はぎぬれて海涼し

（参考文献 「奥の細道」を歩く 山と溪谷社 芭蕉自筆 奥の細道 岩波文庫 他）

「歴代天皇御製歌」(九十二)

貫名海屋資料館

「昭和天皇」②

(昭和二十二年・一九四七年・四十七歳)

日本国憲法施行

あけぼの

たのもしくよはあけそめぬ水戸の町うつつちのおともたかくきこえて

帝室林野局移管

うつくしく森をたちてわぎはひの民におよぶをさけよとぞおもふ

和倉にて

月かげはひろくさやけし雲はれし秋の今宵のうなばらの上に

長野県大日向村

浅間おろしつよき麓にかへりきていそしむ田人たふとくもあるか

(昭和二十三年・一九四八年・四十八歳)

折にふれて

悲しくもたたかひのためきられつる文の林をしげらしめばや
風さむき霜夜の月を見てぞ思ふかへらぬ人のいかにあるかと

(昭和二十四年・一九四九年・四十九歳)

開拓地

かくのごと荒野が原に鋤をとる引揚人をわれはわすれじ

引揚者に對して

外國につらさしのびて歸りこし人を迎へむまごころをもて
國民とともに心をいたためつつ歸りこぬ人をただ待ちに待つ

(昭和二十五年・一九五〇年・五十歳)

名古屋にて

日の丸をかかげて歌ふ若人のこゑたのもしくひびきわたれる

帝室博物館移管

いにしへのすがたをかたるしなあまたあつめてふみのくにたてまほし

(昭和二十六年・一九五一年・五十一歳)

貞明皇后をしのぶ

いでましし浅間の山のふもとより母のたまひしこの草木はも
池のべのかた白草を見るごとに母の心の思ひいでらる

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2018年8月1日

まさか

『本田カイロプラクティック』のアプローチにある

ミントの成長が物凄く早く

朝見て一人ビックリしている

今日この頃です

ここ最近

◎1日だけ熱が出る

◎のどの痛み

◎咳

などの風邪が流行っています

そこで

1つ気になることが・・・

もちろん風邪もあるのですが

◎目の不調

◎のどの痛み

◎咳

◎皮膚の不調

をうったえる患者さんもあります

一見風邪の症状っぽいですが

施術をしてみても

風邪を感じません

何かのアレルギー症状っぽく感じます

もしかしたら

光化学スモッグでは？

気温が高く 風が少ない日

要注意です

2018年8月3日

まさかのアレルギー

汗をかいている時は
なるべく長時間触れぬように
気をつけましょうね

夜になっても気温が下がらず

湿度だけ上がるといふ

危険な熱帯夜となりましたね

朝も窓を開けると

朝特有の涼しい風は吹かず

体力が落ちてしまいます

こんな体力が落ちたとき

汗を大量にかくと

汗疹はもちろん

メッキなどの金属系に

肌が触れていますと

アレルギーを発症しやすくなります

免疫が下がっていて

御津磯夫短歌鑑賞 9

「月虹」 鮫島 満

毛虫らと闘ふすべなきかなしさに立ちたるままの白骨となる

『かうしんばら』昭和五十五年

三句の「かなしさ」は闘いや移動の手段を持たない植物一般の運命をいう。植物のこのようなありようを作者は同歌集の中で

寒竹のかげにみづから生ひたちて冬に入る日の白玉椿

と詠んでいる。「毛虫らと闘ふすべなきかなしさに立」つと詠む一方で、植物は「みづから生ひた」つものとも知っている。自ら生いたつとは自生の意味ではなく、自らの意思で場所を選ぶこともあるということであろう。毛虫に葉を食い尽くされて白骨同様の姿になった植物は何か。それは、この歌のすぐ前に置かれた、

真椿のみどり照り葉のうらおもて並び正しき毛虫うるはし

にある椿である。この毛虫は椿のほか山茶花などのツバキ科の植物の葉を好むチャドクガの幼虫である。これは、成虫が椿の葉に産み付けた卵が孵化したものである。この毛虫の毛は毒をもっていて人が触れると皮膚が異常なほどにかぶれるが、作者はそのことには触れず、いかにも作者らしく「うるはし」と詠んでいる。

この二首目に詠まれるように葉の面と裏に整然とというほどにきれいに並んで葉を食うのである。そして、彼らが去ったあとは、一首目にあるように葉脈だけの木になり「白骨」さながらの姿になるのである。

毛虫に亡んだ木を詠む歌の例を一つ挙げる。

ほとほとに白髪太郎にほろびたる胡桃の木あり養魚場のうへに

（「白髪太郎」はクリケムシのこと）

岡部文夫『寒雉集』昭和二十一年

「氷魚」のことから (212) 岡本八千代

日本の季節の代わりめの美しさは、どこかへ吹き飛んで行ってしまった日々。

西日本豪雨の災害、そして今、熱中症に倒れる人、人。不安や心配のつる現実。その中でありながら「氷魚」の稿を書くことのできる己れの何か、感謝のほかない。

今回も、最近買った本、復本一郎著の正岡子規「人生のことば」に基づいて書いてゆきたい。ここで復本一郎氏について一言。

- ・現在神奈川大学名誉教授
- ・正岡子規と十人の俳士「余は、交際を好む者なり」の著者でもあった。
- ・今回の「人生のことば」の本の帯には「空涙は無用に候」とある。
- ・その他は略す。

子規は明治二十九年（1896年）以降、病臥の状態にあり、少しづつ悪化していた頃「病牀論語」という随筆を書いて、「日本新聞附録週報」に五回にわたり発表した。「論語」とは高熱でうわごとのこと。

※叱り論さるるは思はざるの甚だしきなり

・我が子が現に悪行を為したる場合にすら、知らざるまねして、之を叱り論さるるは思はざるの甚だしきなり。六、七歳以上の小児が全く無邪気にはあらで他人の物を持ち帰るたるが如き、又は隣家の小児を故意に恐迫して泣かしめたるが如

き場合に於いて、其小児の父母は、隣家の小児の父母に対して表面上に我児を叱るとも、裏面には毫も之を懲戒するの意思無き者あり。――。

と。また子規は、

・「叱る」といっても、感情的に叱ることは逆効果である。子供が納得する叱り方をしなければならぬ。

・理不尽（無理）な叱られ方をした子供は、大人になってから「残忍酷薄の人」か「情疑偏狭の人」になると言っている。

・「偏狭」は心が狭い。度量の小さいこと。

・例えば水遊びで衣服をぬらした時、遠くへ遊びに行つて遅かった時。角力をとつて障子、襖を破った時、或器物、又は食物を得たとねだった時、これらの場合に父母は之を叱るのみならず、之を打ち、之を縛し、或は押込、塗込の中に閉じ込めて苦しめる事。

・悪いことをすれば叱らねばならないが、必要以上に叱ることとは、子供の性格を歪めかねない。と、いう。

・いずれの場合にも、「教え諭して、以後を注意せしむれば、即ち足る」のである。

子規は「教え諭す」と言っている。「猫かわいがりも、力ずくの教育も良い結果をもたらさない」と言っていると思う。

現在の私、曾孫の叱り方さへどうしたらよいのかと思つていたので、子規の教育論を受けとめて考えざるを得ない。

スポーツの監督の先生方、学校の先生方、あらゆる仕事の先生方の叱り方の難しさ、いや、親の叱り方が一番難しい原点かなあ。

編集室だより【二〇一八年七月】

○川崎市緑化センターへ俳句吟行。「緑の相談所」故、草花の育て方、植栽の管理方法、病害虫対策など植物に関する質問や相談に答えてくださる。ゴーヤを種から育て、緑のカーテン。ヒートアイランド現象の抑制、省エネルギーに寄与。夏野菜のゴーヤから、暑さに欠かせない栄養を得、俳句になり…すべての植物を有用にと導いていただける。

○漢詩吟稽古日。ストレッチ。発声練習。からはじまる。今日は、李白五十三歳の作「山中問答」。

問余何意棲碧山 笑而不答心自閑
桃花流水杳然去 別有天地非人間
これだけの漢字から、その国、その時代、その景色、その作者…などなど心に込めて吟じる。今回は家元の吟じられたテープを聞きながらの練習だったから、物凄く深さが伝わって、興味深いことをしている実感があつた。

○「近江妙蓮」

インドを源とする蓮の突然異種。六〇〇年以上前から、近江で受け継がれて、滋賀県の近江妙蓮公園に咲いている。

その花びらは、ひと花八千枚を超えするという。雄蕊、雌蕊がない花で。外側の花びらが開いた後、一茎に沢

山の花が見られ、二〇日ほど咲き、花びらは散らないまま枯れてゆくのだと。

千手観音の、その御手に持たれる救済の千の道具のなかに蓮の蕾や、知ることが無かった姿の蓮があり、「仏様の範囲のことだから」と思っていたけれど、「仏様の範囲は、しっかり人の範囲を網羅されておられる」と知るのでした。「近江妙蓮」。出会えてよかった。

○日本語のもと漢字なのだから、漢字のことを知りた、と思いつづけてはいたけれど、何事のないまま過ぎていた。

自作の漢詩をつくる。という機会が巡った。けれど、何千年も前、知らない所、知らない人々に伝わった漢詩というを、わかるはずがない。訳がわからないまま、自身の知識の範囲で、どうにもならない。止めた方が！

それを、導いて下さる先生方がおられた。

このごろ、自作の漢詩というのが一編まとまった。

大恩寺懷古 今泉由利

蕭然雲樹好林泉

路繞登高御山巔

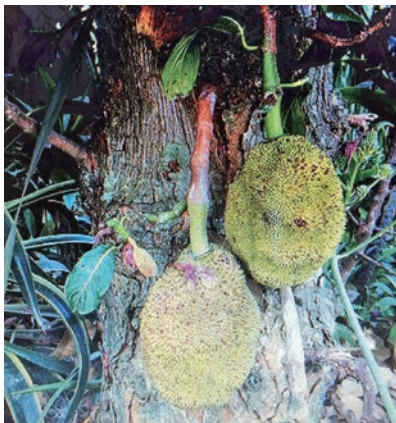
唱和相呼無限量

乾坤塵外素心伝

大恩寺をいなく大恩寺山、この山のふもとで生れ育ち、私のすべてのことが宿っている所。自分の原点を思った時、大恩寺山が浮んだ。漢詩になったつもりでいる。

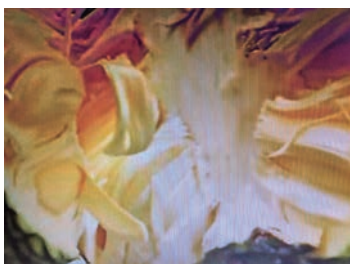
野菜・まんだら

(7) ジャックフルーツ

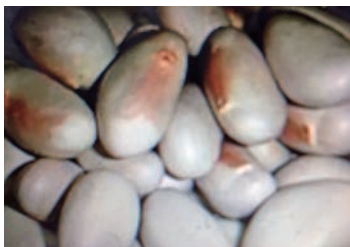


- クワ科、パンノキ属。常緑高木。パラミツ。波羅蜜。英語でジャックフルーツ。
- 原産はインド周辺。東南アジア、アフリカ、ブラジル… 果樹として栽培される。
- 雌雄同様、雄花は枝の先につき、雌花は幹生花と幹につく。
- タイ、ベトナム、インドネシアなどでは、煮たり炒めたりし、種子は焼く、茹でて食用にする。葉と根は薬用。

○βカロテンの抗酸化作用が高く、ビタミン類が免疫力をあげる。ペクチンは整腸作用があり、血中コレステロールを下げる働きをする。バナナより豊かにカリウムをふくみ、心筋梗塞、動脈硬化、糖尿病予防、改善。



- 材は、仏僧の黄色の染料につかわれる。家具、仏像、印鑑、ガムランなど楽器になる。
- 植村直己さんが行かれたアマゾン河を知りたくてブラジルに行った時、ジャングルの中で、ジャックフルーツの木を見つけ、描いてきた。木に近づいて描いたのは、私の大冒険。三河アララギの9月号の表紙にしました。
- 描き終え、ホテルに帰って、ホテル風にきれいにいただいたのを、ひとり黙々食しました。ジューシーではなく、バナナ系の食感、美味しかった。



今泉由利

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (〇三) 五九二四・二〇六五

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ケ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。